
City Brook

kiyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C i t y B r o o k

【NZコード】

N3025D

【作者名】

k i y u

【あらすじ】

ぐだらない世界でも彼らは生を選んだ。

プロローグ

「私達の全てを奪う忌々しい死神！！」

血の海と化した部屋で、女は俺を罵った。女の腕に抱かれた血だけの男。この男には連れがいたらしい。

部屋は血の海だった。俺はドアをぐぐり、外に出る。始末完了。

・・・そうだ。確かに俺は死神と呼ばれていた。

「う・・・血も涙もないのかよ・・・アンタ人間なんかじゃねえよ・・死神だ・・・」

目の前で血だらけになつた男。俺は何も言わず、引き金を引いた。

そうだ・・・俺は死神。血も涙も、心も無い。人間には戻れないはずだった。

「公社の操り人形め・・・地獄に落ちろ・・・」

忌むように俺を睨んだ、血だらけの男がそう言った。

俺は操り人形。自分で考えて行動できない、人形。

フラッショバック。そしてブラックアウト。

幾らでも罵れ。俺は他人から全てを奪つた。

地獄に落ちろ、操り人形、死神。

分かってる。地獄から這い上がるうつとも、苦痛から逃げよつとも思わない。

消せない罪。消せない記憶。全部背負つていく覚悟はあつた。

「ねえ、キミっておもしろいね」

女の声がする。人懐っこく、耳障りで、だけどどこか安心したあの声。

面白い？ 気は確かか？

「ねえ死神くん、今度どつか行かない？」

なんで俺に優しく接してくれたんだ？ こんな俺に：

なんで俺に恐れず接してくれたんだ？ 俺は一般人には戻れないのに。
「・・・大丈夫・・・誰かのために・・・涙を流せるって事は・・・
キミは死神じゃないよ・・・」

何で俺を人間だつて認めてくれたんだ？ 俺はそんな奴じゃない。俺に人として生きる権利は無いはずなのに。

俺は泣いていたのか？ 心は捨てたはずなのに？ なんで俺は？ ・・

俺が弱いから？それとも人の心を取り戻したから？

なあ、俺と出会わなければもっと世界は開けたのか？なあ答えてくれ・・・。

男は夢から目覚めた。時計の針はAM5：00を指していた。

真冬にも関わらず、日差しが少し差し込んでいる。

「夢・・・か」

プロローグ（後書き）

初めてで未熟なところもありますが、宜しくお願いします。

第1話 City(前書き)

読んでくださっている方、本当にありがとうございます。
まだまだ未熟者ですが宜しくお願い致します。

第1話 City

朝はいつだって憂鬱だ。

勿論、グライヴにとつても例外ではない。日にまで掛かっていたボサボサの黒髪を搔き上げて洗面所に向かつ。

背は高く、180cm位か。端正な顔立ちをしている。

彼は蛇口をひねり、顔を洗い始める。

「・・・嫌な夢だ」

完全に目を覚ました彼は手短に合った服を取ると、すばやく着替えを終えて台所へと向かつた。

彼は冷蔵庫を開けると卵を取り出し、フライパンを食器棚から乱雑に引っ張り出す。卵をそれにぶちまけ、火力を最大にセット。

卵は一気に焼き上がり、彼は明らかに腐っているであろうソースをそれに必要以上にかけた。

それをパンに乗せ、一気に食べる。これが朝食。彼の変わった習慣の一つ。

グライヴは服装を整え、外に出る準備をした。別に外に用事があるわけではない。

ただ単に暇なだけである。暇だから外に出る。ただそれだけのこと・

・・。

ドアを開け、鍵を閉めた。

吐く息が白い。冬が近づいている証拠。そんな事は子供だって知っている。

「もうすぐ一ヶ月か・・・」

思わず呟いた。アパートの脇に枯葉の束。

家の周りはまるでスラムのような状態だった。整備された様子も無く、亀裂が走ったアスファルトやコンクリート製の建物が無残な姿を晒している。

野良犬やカラスがそこらじゅうの家の「ゴミ箱を漁り、付近一帯に腐臭を漂わせている。

遠くから銃声が聞こえ、通りの方に歩いていくと途中の路上で黒人男性が胸に銃弾を受け、息絶えていた。

治安は最悪、殺人は日常茶飯事、それがエルレイズ地区。言わば社会から見捨てられた街・・・。

そこらじゅうに転がっている死体や浮浪者を尻目に彼は駅に向かつていた。

別に用事がある訳ではない。ただ暇だから向かつているだけ・・・。

他の街の者は、ここを『終わりの街』と呼ぶ。この町に住む者は皆、

ここから出られないまま、言い換えれば社会の底辺のままで一生を終えるのだ。

「お・・・お願いじや・・・た、食べ物を恵んでくだされ・・・」

通りを10分ほど歩いたところで浮浪者が物乞いをしてきた。

これらは吹き溜まりであるこの街の中でも、最も底辺である最貧困層に位置づけられる者達だ。

「・・・俺は何も持っていない。悪いが離してくれ。」

そう冷たく縋つて来た老人を突き放し、また通りを歩き始めた。

通りの路上は同じような浮浪者の溜まり場となっていた。

ここから抜け出す方法なんて無い。ただ死を待つだけ・・・。

「畜生・・・、畜生!-!」

浮浪者たちの悲痛な叫び。だが彼ら自身には何も出来ない。ただただ、それを受け入れるしかない。

駅前にも通り同様、路上に住処を失った者達が溜まっていた。

駅前には近代的な超高層ビルが林立し、一見、賑やかなメトロポリスを形成しているように見える。

しかし実情はこの有様だ。中央政府は何もしてくれない。ただ、黙つて見ているだけ。

グライヴは図書館に向かつていた。別に読みたい本がある訳ではない。

本を読むことによつて、新しい発見を得ることが出来るかも知れない。これも目的の一つ。

図書館は駅から歩いて3分程度の所にあつた。当然そこに向かつた訳だが・・・

案の定、休館日であつた。開いていないものに一々愚痴を垂らしていたらキリが無い。そう思い、図書館を出た。

図書館の裏路地で3人の男が、一人の少年を取り囲んでいた。

「オイ、ちょっとオ？結構良い身なりしてんじゃねえか。」

「おめえ金持つてんだろ？少しオレ達に貸してくれよ」

「それとも・・・」のナイフでバラバラに切り刻んでやるうつかア？」

男達は少年にナイフやらハンマーやらを向け、何時でも襲える様に構えていた。

「・・・」

「アア？」

「なんだって？」

「失せなさいと言ったんですよ。僕は君らみたいな力スに渡す無駄金を持つてないんです。」

少年は一瞬微笑みながら男達に言い放つた。

一見すると少女のような端正な顔立ち、少しウェーブの掛かった栗色の髪に紅い目。それに、品のある服。傍から見ればまさにブルジョアと形容するに値する身なりをしていた。

「へへ・・・このガキ自分が置かれている立場を理解してねえみたいだな？」

「ちよっとお仕置きが必要かな〜?」

男達は顔に苛立ちの入った笑みを浮かべた。にも関わらず、彼は男達に

「お生憎様。僕は死にませんよ。死ぬのは貴方達。」

と言い放つた。

「糞がつてんじゃねえぞクソガキイイイイ！」

『ぶつ殺す！……』

男達はナイフ、ハンマーを思い切り上げ、少年を狙つて振り下ろした。

彼は手をポケットに突っ込んだままそれを見て、笑みを浮かべていた。

カアン！――――

金属通しがぶつかり合う鈍い音。そして宙を舞うハンマーとナイフ。そしてそれをただ呆然と見つめる男達。

「複数人で一人を襲うのは」

男達と少年は後ろを振り向いた。

手に握られた、長い鉄パイプ。全てを冷淡に見つめるアイスブルーの目。

「みつともないな。」

そこに立っていたのはグライヴだった。

第2話 boy

沈黙が少し続いた後、少年を襲っていた男達はグライヴに凄みを利かせて言つた。

「オイ、テメエ自分が何したか分かつてんだろうな？」

「なあ兄貴、殺しちまおつぜ。バカは死ななきや直らないって言つしなあ」

「ヒヒッ、久しぶりだな。誰かをブツ殺すなんてヨホー！」

男のうちの代表格と思しき一人がジャケットの内側から銃を取り出し、グライヴに向けた。

「俺はこんな所で時間を無駄にしたくないんだがな」

ため息混じりにグライヴが言つ。

「へッ、何をフザケたことを・・・今更泣いて土下座しても許してやら・・・」

次の瞬間、男の持っていた銃は真つ二つになり、『コトン』という音と共に地面に落ちた。

男は何が起きたかを理解できていない。

「なつ・・・凶器なんて・・・ビームに隠し持つてやがったんだ・・・

「

「さあね。このまま大人しく引き下がるか？そこにある玩具みたいになりたいか？」

立場は逆転し、グライヴは男の喉元にそれを突き付けた。

「ア、兄貴……逃げましょう……」「イツヤバそうですよ……」

「ヒ、ヒヒッ……この街に俺ら以上に強いヤツがいるなんて……」

「

「クソッ……お前ら……退散するぞ……！」

男はすばやく、子分達とともに表通りの方へと逃げていった。グライヴは呆れ顔で彼らを見送った。

「まあ何はともあれ……怪我は無いよな？」

グライヴは改めて少年の方に向き直る。

「ええ、御心配なく。この通り無事で」

そう言つと少年は軽く飛び上がって見せた。

「それにしてもこんな所を女が一人で歩いてるのは危険だ。しかもそんな格好ならなおさらな」

「失礼な、僕は男です。それに体力にはそこそこ自信もありますし・・・子供を諭すみたいに言わないで下さい」

「それは悪かつたな。何にせよここには何も無いし、早いといひ帰つた方が身のためだ・・・じゃあな」

彼はそう言つてその場を去り立つした。

「ちょっと待つて下さい。」

少年は再び彼を呼び止めた。

「あなた、この街の人なんでしょ？ちょっと・・・何と言つが・・・街案内でもしてくれませんか？」

「・・・言つただろ。この街には何もない」

「それでもいいです」

「・・・変わつてんな」

グライヴは少年の顔をもう一度見た。

「・・・？」

「え？」

「なんでもない。昔の友人に似ていただけだ」

グライヴは上を向いた。思わず口から出た言葉。自分の弱みを見られたような気分だった。

雲の狭間から、光が見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3025d/>

City Brook

2011年10月4日12時51分発行